

唐船風説書に見る鄭経の「西征」

郭, 陽
九州大学大学院人文科学府

<https://doi.org/10.15017/1498413>

出版情報：九州大学東洋史論集. 42, pp.144-173, 2014-03-31. 九州大学文学部東洋史研究会
バージョン：
権利関係：

唐船風説書に見る鄭経の「西征」

郭 陽

はじめに

康熙一二（一六七三）年一月、康熙帝が三藩の撤廃を命じると、平西王呉三桂は清朝の官吏を殺害し、叛旗を翻した。翌康熙一三（一六七四）年二月には、広西將軍孫延齡が呉三桂に降伏し、三月には福建の靖南王耿精忠もそれに呼応して叛乱を起こしている。さらに四月になると、鄭成功の長子鄭経（一六四二〜一六八二）も、台湾から大陸に進軍して叛乱に加わり、一二月には、西北方面でも陝西提督王輔臣が挙兵した。さらに康熙一五（一六七六）年には、広東において平南王尚可喜の子である尚之信も呉三桂に投降した。こうして前後九年にわたる「三藩の乱」は最高潮に達し、清朝の中国支配は、明清交替から約三〇年間を経て、最大の難局を迎えることとなった（文末表参照）。

三藩の乱について、従来の研究では、おもに清朝が、呉三桂をはじめとする三藩を平定する過程が検討の主役となり、彼らに呼応して挙兵した鄭氏勢力の活動は副次的なものとみなされてきた^①。一方、鄭氏台湾に関する研究では、三藩の乱を契機とする鄭経の軍事活動について、早くから検討が進められてきた。古くは江戸時代の川口長孺による著作があり^②、明治時代には宮崎来城^③、大正時代には稲垣孫兵衛により概説がなされている^④。さらに戦後には、石原道博や林田芳雄が鄭経による「日本乞資」や、清朝との攻防を論じており^⑤、台湾の楊雲萍・張炎・黄玉齋・葉高樹^⑥、大陸

の李鴻彬、張仁忠⁷なども、鄭経の大陸反攻をめぐる複雑な状況を分析し、鄭経の挙兵から敗退に至るプロセスを叙述している。ただしこれらの研究では、基本的に鄭氏側・清朝側の漢文文献を史料としており、三藩の乱や鄭氏勢力について記述した、同時代の海外文献は十分に活用されているとはいえない。

三藩の乱の時期にも、台湾の鄭経をはじめ、広東の平南王や福建の靖南王は、積極的に日本や琉球・オランダ・イギリスなどと通商を行っており⁸、清朝の側でも、オランダに助勢を求めたことがあった⁹。さらに朝鮮も、燕行使を通じて中国情報の収集につとめていた¹⁰。こうした経路を通じて、漢文史料のほかにも、朝鮮・日本・オランダ・イギリスなどの海外諸言語の史料に、三藩の乱に関する記述が残されることになったのである。とりわけ日本では、長崎に來航する華人海商の供述を、ほとんど手を加えずに記録した「唐人風説書」が体系的に作成され、幕府の儒官であった林春勝・林信篤により、『華夷変態』として集成されている¹¹。

ただし日本に伝えられた三藩の乱をめぐる情報については、呉三桂の動向よりも、日本との関係が深い鄭経に関する消息のほうがはるかに詳しい。林春勝も、「爾來、(華人)商船が長崎に至つて、錦舎(鄭経の幼字)のことを伝えるものが多かったが、呉三桂については偶に聞き及ぶにすぎず、大まかで具体性を欠いていた。錦舎は長崎からあまり遠くないところにおり、(華人)商人が見聞する機会もあるが、呉三桂は海陸を遙かに隔てた西南におり、その関係者が来ることもない」と述べている¹²。

本稿では、『華夷変態』所収の唐船風説書の分析により、三藩の乱における鄭経の軍事行動について、華人海商が長崎に伝えた情報を通じて再検討してみたい。鄭経の大陸反攻については、国家統一の阻害要因と見る立場もあれば、南明の正朔を奉じ明朝復興を目指す義挙とみる観点もある。前者は鄭経を「海逆」と断ずる清朝側の観点と一致する面があり、後者は伝統的な華夷観念に通じる面があるといえよう。これに対し、中国東南沿岸部・台湾、さらには東南アジアから長崎に來航した同時代の華人海商は、時には鄭氏・靖南王・平南王などの割拠勢力の立場を反映しながらも、街談巷説を含む、現地の商人や民衆の時局観を日本側に報告している。従来の研究でも、『華夷変態』所収の呉三桂や鄭

経が発した漢文の檄文が、清朝史料では抹殺されていた叛乱側の主張を伝える史料として、多くの注目を集めていた¹³⁾。しかし、唐船風説書に示された同時代の華人海商による情勢認識や主観的判断などについては、それらが候文による日本語によつて記録されていることもあつて従来の研究ではほとんど検討されていない。このため本稿では、唐船風説書に見える海商の証言を、関連する漢籍文献と照合して検討することにより、鄭氏勢力の軍事行動に対する、各地の華人海商の認識を考察することにした。

一 江戸幕府と三藩の乱の情報

延宝二(康熙一三・一六七四)年六月三日、江戸幕府の老中久世大和守(広之)は、長崎奉行牛込忠左衛門(重忝)¹⁴⁾により呈上された、呉三桂と鄭経が飛ばした檄文を入手し、翌日に幕府儒官の林春勝に渡した。呉三桂の檄文では、三〇年間かくまっていた明朝の「三太子」を即位させ、無道な夷虜である清朝に叛旗を翻すことを宣言し、鄭経の檄文では、呉三桂に呼応して大陸に反攻することを告げていた¹⁵⁾。

これらの檄文にくわえ、「貳番福州出し船の唐人共申口 自長崎来」と題された唐船風説書一通も、同時に長崎から幕府に送呈されていた。それまでの風説書は、主に書簡や記事の形式をとっており、『唐通事会所日録』の記事からも、特に重要な事項がある場合だけ、唐船風説書が作成されていたことが分かる¹⁶⁾。しかし延宝二年からは、三藩の乱の情報収集を契機として、『華夷変態』第二巻以下に収録されるような、「何番船唐人共申口」と題された定型化した風説書が、長崎に入港したすべての唐船から、連続的に聴取されるようになった。三藩の乱の勃発を受け、江戸幕府は長崎での風説書作成を制度化し、情報収集を強化していたのである。そして林春勝は、延宝二年六月四日に呉三桂らの檄文などを入手したのを機に、六月八日から自家に保存していた中国関係の記録を時系列的に整理し、『華夷変態』の編纂

に着手している¹⁶⁾。

同年の九月一七日、幕府老中稲葉美濃守（正則）は、福州の靖南王が琉球国王に宛てた令諭や、福州から帰国した琉球人の供述とともに、新たに呉三桂の檄文二通を林春勝に送付して、漢文の和解を依頼していた。これらの琉球ルートによりもたらされた二通の檄文と、前述の長崎ルートによる檄文と対照して、林春勝は、「文字少々かはり候へども、心は同事にて候、文言も先度参候よりはをとり候様に被存候」と述べている¹⁷⁾。確かに三通の檄文の内容は大同小異である。ただし琉球から伝えられた二通の檄文のうち、「総督天下水陸大師興明討虜大將軍呉、為曉諭事」と題された一通には、他の檄文にはない、鄭氏が「日本・琉球・安南・交趾・女直・朝鮮諸国の伏兵数百万を率い、將軍数千員を選び、久しく時機を窺い、共に大挙に加わった」という一句もみられる¹⁸⁾。呉三桂側は、東アジア諸国が鄭経の統率の下、三藩側に加わったという、誇大な喧伝を行っていたわけである。しかしこのような檄文に対し、幕府の態度は冷淡であった。約三〇年前に南明や鄭氏が試みた日本乞師に対しては、幕府内部では一時的に出兵の準備が取り沙汰されたこともあった¹⁹⁾。しかし今回は、叛乱に関与しようとする議論は全く見られず、幕府はもっぱら情報収集体制の強化につとめて、局外中立の姿勢を貫き、中国の戦乱とは完全に一線を画したのである。

二 鄭経の大陸反攻と耿精忠との内訌

寛文三（康熙三・一六六三）年ごろから、鄭経は一族の鄭泰が長崎の唐通事に預けたままになっていた銀の返還を求めて、数次に亘って自ら長崎奉行に書簡を送っている²⁰⁾。しかし、鄭経の大陸進軍についての情報をはじめて日本に伝えたのは、彼自身の書簡ではなく、華人海商がもたらした風説書であった。鄭軍の大陸進攻と、その後の靖南王耿精忠との内訌については、清朝の官制史書や檔案史料には関連する記述が乏しく、先行研究では主にその経緯を叙述した野

史類に依拠している。一方、華人海商がもたらした風説書には、これらの野史類には見られない独自の情報も、真偽は別として少なからず含まれている。本節では、まず鄭氏勢力の大陸進攻と耿精忠との内訌の経過を、先行研究を参照して概観し、そのうえで唐船風説書に残された関連記事を比較検討してみたい。

まず野史類を主とする漢文史料に記された、鄭経の大陸反攻の経過は次の通りである²⁰。康熙一三（一六七四）年三月、福州に拠る靖南王耿精忠は、清朝に対して反旗を翻すにあたり、福建各地の地方勢力の反抗に備え、まず台湾に使者を送り、協力を要請した。耿精忠はその際の条件として、①福建水軍の指揮権を鄭氏に譲渡する、②鄭軍に漳州・泉州での駐屯を許可する、③共同で南京方面へ進軍する、という三点を提示している。呉三桂からも、鄭経に出兵を促す要請があり、これに応じて、鄭経は軍隊を率いて廈門に渡航した。ところがすでに福建全土を勢力下に収めていた耿精忠は、鄭氏の軍勢を軽視し、その上陸を阻止してしまった。これに対し、泉州・漳州の主将は、耿精忠による徵発を忌避して鄭経側に寝返り、さらに耿氏に帰順していた広東潮州の主将までも、鄭経に従属してしまった。こうした対立の結果、両軍はついに興化において衝突し、耿精忠は鄭経の攻勢を支えられず、関係回復を図ることになった。その結果、呉三桂の斡旋により、両軍は康熙一四（一六七五）年正月に、泉州府と興化府の境界である楓亭を境に、福建を分轄統治することを約定して講和を結ぶことになる（文末地図参照）。

以上が漢文史料に記された鄭経と耿精忠の内訌の経緯であるが、華人海商は唐船風説書において、この戦役についてどのような証言を残しているのだろうか。まず耿精忠の出兵要請と、それに対する鄭経の反応については、延宝二（康熙一三・一六七四）年五月に長崎に入港した「二番福州船」の風説書に、次のような記述がある（下線は筆者による、以下同じ）。

錦舎儀、元より此節を相待罷り有候得者、大に悦則人数数十万程、船大小九百隻余、是も段々に南京へ発向仕候、但福州に在之候兵船之分、皆々靖南王より錦舎へ遣し申候由承候、錦舎は六月初に東寧を出靖南王と南京にて勢を合申筈に御座候²¹。

これによれば、鄭経は十数万人の大軍を率いて出陣し、漢文文献にも記されているように、①耿精忠から兵船を提供され、③六月には南京（ここではひろく江浙方面を指す）へと進撃し、南京で耿精忠の軍隊と合流する計画であったという。この情報をもたらした華人商船は、四月二六日に福州を出航しており、このころ福州方面では、このような情報が流布していたのである。この時点では福州を本拠とする耿精忠が、ことさらに鄭経の軍勢を誇張し、鄭経との協力關係を強調することによって、支配地域における勢威を固めようとしていた可能性もある。

しかし約一ヶ月後、六月一四日に聴取された「八・九番東寧船」の風説書では、鄭経と耿精忠が早くも対立し始めたことを記している。

靖南王少欲心を挟……其之右所々之兵船を不殘錦舎に遣候者、万一錦舎異心之節、海辺を可防様無之時は、可及後悔とて、船を遣候事を猶予仕候処に、錦舎不審存、稠敷使を靖南王へ差越、右之船を約諾のごとく被遣候へと申越候得ば、元より評定仕置候事に御座候故、無是非右所々之船共相渡し申筈に罷成候付、錦舎儀東寧兵船大小三百艘余、士卒三四万程を率し、さる三月一四日、東寧を出船仕、先漳州へ発向仕候、漳州にて兵船を相揃、段々浙江表へ攻寄、陸手之靖南王勢と相攻に仕筈に御座候²³。

東寧（台湾）船の海商によれば、靖南王は福建全省を掌握することをもくろみ、それに対し鄭経が沿海部に侵攻することを危惧して、①兵船の提供を拒んだため、鄭経は執拗に約束の遂行を求めていたという。ただしこの海商は、最終的に兵船の提供が履行され、③江浙方面への進軍も実施される見込みだと予想している。一方、②泉州・漳州を鄭経に引き渡すという問題については、漢文史料に記されていない、次のような交渉経過を伝えている。

今度錦舎靖南王と致合心候付、福建八府之内泉州漳州之二府、錦舎江遣し可申之由御座候へ共、錦舎合点仕不申、四府之官領相望申候所、靖南王より興化と申一府を相添、都合三府を可令官領之由御座候へ共、錦舎未合点無之、是非四府可申請との望に御座候、然共靖南王評議相濟不申候、極意は三府にて相濟可申哉と承候と申上候²⁴。

鄭経は耿精忠に対し、泉州・漳州の二府だけではなく、福建八府のうち四府を割譲するように要求した。それに対し、

靖南王は泉州・漳州に興化府を加えた、三府を譲渡することで妥協を図っている。双方はまだ合意に達していないが、恐らく三府の譲渡で決着するだろう、というのが台湾船の海商の予想である。靖南王が鄭経に三府の割譲を認めたといいことは、他の史料では確認することができないが、当時の台湾ではこのような樂觀的な観測もなされていたようである。

一方、七月一五日に聴取された「一番広東船」の風説書では、六月初めに耿精忠の本拠である福州から、この時点ではまだ清朝側に属していた平南王尚可喜が支配する広東へ密航した商人の話として、「錦舎」存之外無勢之上、兵船も纔之儀に御座候に付、靖南王案に致相違、錦舎を欺く心に罷成、諸事不挨拶にて、靖南王其身一手にて南京浙江をも取可申之様子に相見へ、兼約相違仕候に付、錦舎殊之外立腹いたし、泉州之内同安県と申所を押領仕候」と記されている（「」内は筆者の補記。以下同じ）²⁵。ここでは漢文史料の記事と近く、耿精忠が鄭経の兵力不足を軽んじて、独力で江浙方面に進軍しようとしたため、鄭経はこれに怒って泉州同安県に侵攻したという消息が記されている。

以上の台湾・広東船の風説書では、耿精忠の背約行為を内訌の主因としているが、それに対し、一〇月一七日の「二番福州船」の風説書では、むしろ鄭経側に批判的である。

其上兼而錦舎方より泉州漳州二府を給候様にと届申候へども、靖南王申候は、天下の大事を存立、いまだ本意さへ不遂内に、最早領地を相望申事、不届之儀に有之候に、殊に早々南京も兵を被寄候へと申而も、其甲斐なく、剩さへ此方の兵船共をも申請度との事共、再三理不尽を申候由に而、靖南王立腹いたし、…王走虎²⁶と申者を大将として、勢十万程にて、錦舎を攻申筈に議定仕り、此間より段々に勢を興化府迄差遣、陣取仕候由承申候²⁷。

鄭経は天下の大局を顧みず、清朝への反攻も遂げないうちから領地を望み、江浙方面に進軍しようともせず、耿精忠に兵力や軍船を要求したため、ついに耿精忠は十万の兵を出して鄭経に攻撃することになったのだという。なおこれらの福州船の海商は、耿精忠の水軍の護送のもとで出航し、出発の前には耿精忠からの指令を受けたとも供述しているの

しかし一方で、福州船の海商は、鄭経が福建上陸してからの動向について、次のような証言も残している。

錦舎儀は、兼而慈悲深く、其上前に東寧より致反逆候者共之子々孫々に至るまで、前廉の遺恨を捨、愛寵を以令帰参候、是等之徳により、廈門江着陣之後、手に付申候軍勢六万余……廈門着き申候而後、新造船四百艘ほど作り……泉州一府靖南王江叛逆いたし、錦舎を泉州へ請じ申候に付、只今錦舎泉州江在城仕候、錦舎も靖南王より討手寄せ申由承候に付、敵対仕覚悟に御座候²⁸。

鄭経は慈悲深い性質で、以前に鄭氏勢力を裏切つて清朝に降つた者にも恩赦を与え、それによつて短期間に六万もの兵力を確保できた。さらに彼は廈門で兵船を四百艘ほど新造し、泉州を支配下に収めて耿精忠の来攻に備えているという。漢文史料によれば、康熙一三（一六七四）年三月に挙兵した耿精忠は、「數日を待たずに、教騎の使者をして檄を飛ばさせ、福建全省を手中に収めた」²⁹が、福建南部の在地勢力が耿氏に面従腹背して、四月には海澄県・同安県、六月には泉州府・漳州府の守将が鄭経に寝返つている³⁰。漳州の海澄公黄梧は、かつて鄭成功に背いて清朝に投降し、鄭氏祖先の墳墓を曝いた人物であり、鄭経にとつてはまさに父祖の仇であつたが、それでも鄭経は黄梧の子の芳度の降伏を受け入れ、彼を徳化公に封じている³¹。福州船の海商は、恐らくこのような状況を見聞して、鄭経が「慈悲」を以て福建南部の勢力を吸収し、兵力の急増を達成していたと指摘したのでらう。また彼らは、鄭・耿両軍は対峙を続けているが、「定一両戦は仕に而可有御座候、以後は和融之沙汰にも罷成可申と諸人も申候」と³²、たとえ両軍が衝突したとしても、その後は講和を模索するだろうとも予測している。

翌延宝三（康熙十四・一六七五）年三月晦日の「一番福州船」風説書では、鄭経と耿精忠の対戦とその後の講和について、次のように報告している。

同年十一月七日八日の頃互に合戦仕候処に、両陣共に人数五六千餘づつ被打、勝負も然と知れ不申候内を幸として、共に和議仕候ば、いまだ清朝韃靼をも不打平以前に、御方互に變乱を起し候事不宜候とてあつかひに罷成、和睦の上互に陣を引取候上にて、剩へ正月に双方縁を結び祝言を仕候て、只今は別て合心仕罷在候事に御座候、就夫靖南

王指図として、錦舎より軍數萬、広東の内惠州と申処へ令發向攻申筈にて御座候、当夏は靖南王錦舎両手にて南京を攻申候に議定仕候⁽³³⁾。

一月に鄭・耿両軍はついに戦端を開き、共に五・六千人の死傷者が出たが、勝負が決しないうちに、共通の敵である清朝が掃滅されていないのに内訌を続ける愚を避け、講和を結ぶことになった⁽³⁴⁾。その結果、鄭経は耿精忠の指揮のもので、まず広東への征討に転じ、翌夏に共同で江浙方面へ進軍することを約束したというのである。

しかし漢文史料では、鄭経と耿精忠の対戦について、鄭経配下の劉国軒や許耀が耿精忠陣營の王進を撃退して、興化まで追撃したと記しており⁽³⁵⁾、対戦が相打ちに終わり、靖南王の「指図」に従って鄭氏が広東へ進軍したという、福州船風説書の説明とは齟齬がある。耿精忠の本拠地であった福州では、耿氏に不利な戦況が糊塗され、耿精忠が鄭経に広東進撃を命じたという、耿氏寄りの情報が流布していたのかもしれない。

以上、鄭経と耿精忠との内訌について、延宝二年の①「二番福州船」、②「八・九番東寧船」、③「二一番広東船」、④「二二番福州船」、と延宝三年の⑤「一番福州船」の風説書を紹介し、その言説を漢文史料と対照してみた。耿精忠が挙兵した当初は、①福州船風説書でも、盟軍である鄭経の兵力をかなり誇大に伝えている。しかしその後、双方の間で約束の履行や勢力範囲の設定をめぐる対立が生じる。この時点で、②台湾船風説書は、勢力圏をめぐる鄭・耿両軍の駆け引きを伝えるなかで、耿精忠の兵船譲渡拒否を背約行為とみなし、また鄭経は福建三府を接收するという見通しも示している。また③広東船風説書では、鄭・耿両軍の内訌は、耿氏側が鄭氏側の兵力不足を軽視したこと起因したとみなしていた。

それに対して、耿精忠の勢力下で出航した④福州船の風説書では、鄭経が耿精忠に対して無理に領地を求め、兵力や軍船の提供を要求したことが、内訌の主因であったとする。また翌年の⑤福州船風説書では、漢文史料とは異なり、耿精忠側に不利な戦況が伝えられていない。④福州船が明らかに耿精忠の統制下にある以外は、他の四船がどの程度鄭経や耿精忠の影響下にあったのかは不確実だが、全体として、出港地を支配する勢力にとって、より有利な状況分析を伝

える傾向があることは認められるだろう。

三 鄭経の広東・福建領有構想をめぐって

康熙一三（延宝二）年四月二〇日、潮州総兵の劉進忠が清朝に対して叛旗を翻し、同じく潮州に駐屯していた「統順公」沈瑞の抵抗を抑え、隣接する福建の耿精忠に帰伏した³⁶。しかしその後、劉進忠は平南王側の尚之孝に攻撃され、鄭経との内訌によって不利な局面にあった耿精忠からの援護を断念し、鄭氏勢力の傘下に入ることとなった³⁷。十一月に、鄭経の援兵は潮州に進軍して、翌十二月には潮州に迫った清軍を撃退し³⁸、さらに翌（一六七五）年正月には、潮州府饒平県に拠った沈瑞をふたび降伏させた³⁹。潮州に来襲した清軍を撃退したことによって、鄭経は潮州での足場を固め、さらに広東方面で平南王の領域にも食い込み、勢力拡大を図っていく。

延宝三（康熙一四・一六七五）年七月二〇日の「二七番思明州船」風説書において、思明州（廈門）船の海商は、平南王尚可喜が耿精忠を通じて鄭経との講和を試みたという、漢文文献には見えない情報を伝えている。

「淑順公（統順公沈瑞）」平南王賀之儀に御座候に付、錦舎より即刻安定候（実際には懷安候）⁴⁰の官位授け、其儘饒平に罷在候、右之段々に而、広東も行々は大きに害可有之と存候か、平南王より福州靖南王江使官十二人まで指越、錦舎と互に和融之内意申来、則靖南王あつかい被申候様にと之事之由、私共出船之砌承申候、左候はば平南王も程なく明朝に成可被申候と存申候⁴¹。

平南王尚可喜の婿（実際には外孫）⁴²である沈瑞が鄭経に降つたため、平南王は鄭経に恐れをなし、広東への侵攻を心配して、やむを得ず、すでに鄭経と講和していた耿精忠に調停を依頼したのでという。尚可喜から耿精忠への調停依頼については、漢文文献では関連する記述を確認することができないが、平南王は耿精忠とは姻戚関係にあり⁴³、実際に

鄭経との講和の仲介を依頼した可能性もなくはない。廈門海商は、このような情勢により、平南王も遠からず「明朝」(二)ここでは呉三桂・耿精忠・鄭経などの反清勢力を指す)に降伏するだろうと予想している。

この廈門船風説書では、さらに前節でも言及した、漳州における黄芳度の反乱についても伝えていいる。それによれば黄芳度は、「去年大清を背き錦舎方江降参仕候所に、間もなく錦舎方を背き、人数一万余に而籠城仕り」と、清朝に寝返つて鄭経に叛いたが、鄭経は「所詮攻候とて、又々軍民を害し益なき事に候間、只取りまき候而」と、軍民を害さないように漳州を包囲するにとどまつていた。しかし「合戦は爾今無御座候、依夫城中も殊之外指詰まり申様に罷成間、追付又又降参仕候而、可有御座候と、諸人申事に御座候」と、鄭経の兵糧攻めによつて漳州城内は窮迫しており、清朝からの援軍も「広東江参申候処に、則錦舎方之勢と相戦、李正泰五万余之勢悉く打負け、漸数千之人数相残り敗北仕候」と、鄭軍に撃退され、まもなく漳州は落城する見込みだといふ(4)。

これに対し漢文文献では、黄芳度が六月に漳州に籠城してから、鄭経は何度も激しい攻撃を仕掛け、相当の犠牲を払つても容易に攻略することができず、十月に至り、城内の内通者の協力でようやく落城させたといふ(5)。七月に長崎に來航した廈門船が、鄭経が漳州を包囲するにとどまり、その落城も間近であると伝えたのは、実際よりも鄭経側に有利な情勢分析となつている。

なお耿精忠の本拠地であつた福州から長崎に來航した海商も、一月二五日の二八番福州船「風説書において、「漳州」錦舎領国之内之事に御座候得ば、急にも攻不申、遠々取かこみ罷在迄に御座候所に、当九月無難攻落し」と、鄭経は漳州を包囲して、難なく攻略したと伝えている(6)。このように鄭経は、福建南部の支配を固めるとともに、広東東部への攻勢も強めていった。上述の福州船風説書には、「錦舎」広東之内潮州府惠州府、此二府を攻取、広東平南王之嫡子公之位に而御座候を、対陣仕罷在、並三男も大将に而罷在候を、二人共に打取申候段、……弥広東之本城攻取申覚悟之由承申候」ともあり、平南王尚可喜の嫡子と三男が殺され、惠州も鄭経に奪われたという風聞までも記されている。実際には、この時点で惠州はまだ攻落されていなく、平南王の子が戦死した事実もない。福州では、広東における鄭経

の戦果が過大に伝わっていたようである。

この「二八番福州船」で来航した海商は、翌延宝四（康熙一五・一六七六）年二月八日に、「一・二番福州船」により長崎に再来航している。この際の風説書では、広東の形勢について、前年の風説書における報告を次のように訂正している^④。

惠州府も取申候と去年は申候得共、実は未取申候、只今は錦舎も右広西女王之軍兵又は吳三桂にひるがへり申候四府之軍兵とも一同に、広東之本城を攻申筈之由に御座候、錦舎も如何様自身下向可仕との沙汰は御座候。

前年に報告した、鄭経が惠州を攻略したという情報は事実でなく、現在は鄭経の軍勢にくわえ、「広西の女王」^⑤や吳三桂に投降した広東西部の四府の軍兵が、東西から広州を挟撃することを企図しており、鄭経自身も広州方面に参戦するという消息が流れていたという。そのうえで福州船の海商は、「平南王」先力之及候迄は大明方を防ぎ、行々はとかく可難守候間、其節ひるがえり可申様子に而御座候と、諸人風聞仕候」と、広東の平南王尚可喜も、まもなく「大明」側に寝返るだろうと予想している。

漢文文献によれば、この福州船風説書が聴取された二月には、劉進忠が惠州の周辺を次々と攻略し^⑥、さらに吳三桂の軍隊も広西から広東へと迫るなかで、高州府でも叛乱が起こり^⑦、加えて尚可喜が病床に伏したこともあつて、腹背に敵をうけたその子の尚之信は、ついに二一日に吳三桂に投降している^⑧。六月四日の「六番潮州船」風説書では、この間の経緯について、尚之信は鄭経の進攻に抗しきれず、惠州を放棄して広州へ撤退したが、西方からは吳三桂の圧力も強まり、ついに「平南王もとかく敵対罷成間敷と存、其上兼々大明に翻り可申心底も御座候に付、三十人余有之候子共ともに一同に無異儀、当四月廿日に吳三桂江属し申候而、大明方に成申候」と、平南王が三十人あまりの諸子とともに吳三桂に降伏したと伝えている^⑨。ただし漢文文献では、吳三桂に投降した尚之信がみずから惠州を放棄した^⑩、あるいは尚可喜が吳三桂に降伏した後、吳の命令に従つて惠州を鄭氏に譲渡したと記されており^⑪、鄭経自身が惠州を攻略したという記述は残されていない。

またこの潮州船風説書では、尚可喜が呉三桂に投降した後の鄭経の動向について、次のような風聞も伝えている⁶⁵。

錦舎も人数を平南王本城江指向、呉三桂勢と相争ひ本城を奪ひ可取と存候得共、互に御方之争ひに成候而は、却而軍之不吉と存候に付、先呉三桂方江取らせ置申候、追而広東一省之儀は錦舎方江所望可仕覚悟に御座候。

これによれば、尚可喜が呉三桂に帰伏すると、鄭経は呉三桂との内紛を避けるため、とりあえず呉三桂の広州領有を認めめたが、やがては広東全省を領有するという望みを棄てていなくなったという。そして「呉三桂も兼而諸事共に錦舎とは内外一致之事に御座候得ば、広東之儀は本城ともに錦舎江相渡し可申様子に御座候とも承申候、左候はば、とかく行々は広東一省錦舎領分に罷成可申と存申候」とあるように、呉三桂も恐らく鄭経との協力関係を維持するため、広東を鄭経に譲渡するという予測も示している。

さらにこの風説書では、広東だけではなく、福建における鄭経の勢力拡大についても、次のような記述がある。

汀州府と申候一府之守護、靖南王に違き錦舎手に付申候、然ども靖南王よりとかくの事無御座候、靖南王も殊之外錦舎江は氣を被奪候様子に而御座候、総而福建一省之儀は錦舎兼々相望申により、靖南王も申入候は福建之儀は此方江御付け所希に候、浙江儀は其方に御攻取被成候得と数度申たるとの事に御座候⁶⁶。

つまり鄭経と耿精忠の講和が成立した後に、耿精忠の勢力範囲とされた汀州府が鄭経のもとに降つたが、これに対して、耿精忠は何ら手を打つこともできなかったというのである。そのうえ鄭経は耿精忠に対し、自らは福建を領有し、耿精忠は浙江を攻略することを提案したとも述べている。このように、鄭経の勢力下にあつた潮州から来航した海商は、広東の平南王も福建の耿精忠勢力も鄭経の勢力に押され、鄭氏は広東・福建の両省を掌握することを図っている、という情報を伝えているわけである。

しかしこれに対し、八月五日の「二一番広東船」風説書には、鄭経と尚之信による惠州の攻防について、次のような記述がある。

「惠州の尚之信は」東寧の錦舎より攻圍之申候得共、一城堅固に相守り、錦舎勢攻寄せ候得共、城中より強く防ぎ

申に付、却而攻手大分勢を被討、城中少もさわぎ不申、何様錦舎勢とは勝負をも決し可申といさみ居申所に、父平南王、右之通大明方に成り候而、早速惠州府安達公へ告げ来り……惠州儀は明け候而錦舎方へ遣し、其方早々帰城仕候様にとの事に而御座候に付、安達公父之下知にしたがい、城をあけ根城父之方江罷帰申候而後、何方にも軍戦無御座候⁵⁷。

この広東船は、「今度船^マ共船^マ之儀も安達公より許大官江申付仕出し申候」とも述べているので、安達公（尚之信）の指令を受けて出航したことがわかる。そしてその風説書では、尚之信は惠州を堅守し、鄭経の軍勢は撃退され多くの損害も出したが、最後には尚之信が尚可喜の召還命令に従い、自主的に惠州城を鄭経に明け渡したと伝えているのである。

このように、鄭経の広東方面への進攻について、その勢力下にあった廈門や潮州から長崎に来航した海商は、全体として鄭経が漳州の黄芳度や惠州の尚之信などを軍事的に圧倒し、広東・福建二省への勢力拡大を図っているという情報をもたらしした。また耿精忠の勢力下にあった福州から来航した海商は、鄭経による広東進攻の戦果を、かなり誇大に伝えていいる。これに対し、尚之信配下の広東から来航した海商は、鄭経の惠州攻撃は失敗し、尚之信が父の命令によって自主的に開城したと述べていいるわけである。『華夷変態』所収の唐船風説書の情報には、特に三藩の乱の前後には、その船がいかなる政治勢力下から出航したかによって、地域的なバイアスがかかっていることに留意すべきであろう。

なお上述の「六番潮州船」のほか、七月一二日の「一〇番思明州、一一番・一二番東寧三艘船」の風説書にも、やはり汀州の守将が耿精忠から離反して、鄭経に投降したという情報を伝えている⁵⁸。これらの廈門船や台湾船の海商は、耿精忠は汀州の離反を黙認したと述べていいるが、実際には鄭経と耿精忠との同盟関係は、汀州問題を機にふたたび破綻し、耿精忠は清朝と鄭経に南北から挟撃され、康熙一五年一〇月四日にいたり、剃髪して清朝に降伏してしまった⁵⁹。こうして鄭経は、ついに清軍と直接的に対決することになったのである。

四 鄭經の清軍との交戦と廈門への撤退

延宝五（康熙一六・一六七七）年正月一三日の「一番南京船」風説書は、「福州之内数カ所錦舎方を慕ひ、靖南王に背き、錦舎手に罷成申により、ケ様之意趣に而、遺恨を挟み、去年十月に、靖南王又又髪を剃り大清に翻り申候」と、耿精忠が清朝に投降したことを伝えている。そして「錦舎只今は人数興化府に指向け、興化府より福州を攻申筈之由承申候」と、鄭經がこれを受けて興化府に軍勢を派遣し、福州攻略を目指しているとも述べている⁶⁵。漢文史料によれば、耿精忠の配下にあった邵武府・興化府の主将は、清朝に投降することを肯んぜず、相次いで鄭經に帰服し、鄭經は許耀塵下の軍勢を興化に進め、清軍と対峙することになったという⁶⁶。一〇月一五日、両軍は福州近郊の烏龍江において対戦したが、許耀は、傲慢で配下の諸將を統制できず⁶⁷、敗退を喫したのである⁶⁸。

ところが三月一三日の「二番南京船」風説書では、実情とはかけ離れた、鄭軍が大勝利を収めたとする情報を伝えている⁶⁹。

最初は錦舎勢敗北の躰を見せ、勢を少引取申候得者、福州勢勝に乗り長追仕候を、烏龍江左右之大山より伏兵を出し、福州勢を中に取囲打申候に付、福州勢散々にうたれ、人数二万ほど死失仕候、先総大将大清之親王を始め其外の諸將都合四十人程、錦舎方江同日に打取大利を得申候事、比類無御座候由承申候⁷⁰。

鄭經は策略をめぐらし、撤退を装って伏兵に清軍を奇襲させ、清朝の親王を含む二万ほどの清軍を殲滅し、大勝を収めたというのである。清朝の支配下にあった南京（江浙方面）でも、事実無根の鄭氏に有利な風聞が流布していたようだ。実際には、鄭經は烏龍江の大敗から完全に守勢に回り、一二月六日には邵武を⁷¹、一〇日に汀州を清軍に奪われ⁷²、翌康熙一六（一六七七）年正月二九日には興化府も失っている⁷³。勢いづいた清軍はさらに南進して、二月九日には泉州を攻略した⁷⁴。この結果、鄭經は一四日に漳州も放棄して⁷⁵、廈門への撤退を強いられたのである。

六月に入ると、鄭経と清朝の攻防をめぐるより詳しい情報が、ようやく日本にも伝えられた^⑩。一九日の「三番思明州船」風説書では、鄭軍の総崩れとその敗因について、次のように伝えている。

大軍の事に御座候得ば、兵糧続き不申、士卒之心変乱に罷成候故、当正月廿八日に福州勢と致対陣、及一戦に申候内、士卒共悉く内乱仕、過半逃げ散り申候……其節のいくさ錦舍方敗北仕……右之ごとく一戦敗北により、漳州泉州汀州興化邵武、此五府共に大将之分は反逆之心無之候得ども、軍士之分皆々致変乱、大清方に相成申候而、錦舍に背き、只今錦舍一府も所領仕不申、漳州之内廈門と申所へ引取居申候。

鄭経の軍勢は、軍糧補給が続かないうえ、兵士の反抗や逃亡も連鎖的に起こり、結局は清軍に敗退し、福建五府をすべて失ったというのである。その一方で、この思明州（廈門）船の海商は、なお戦局は流動的であり、鄭経が情勢を挽回する可能性もあるとも述べている。

存之外大清方は彌兵糧乏く御座候而、一足も留申事罷成不申、思ひ思ひに諸方之山々に打散り、却而大清方を乱奪仕候、就夫錦舍も右敗北之儀に少もひるみ不申、只今又於廈門に、最中軍勢を揃、軍士を招き寄せ、追付間もなく福州へ令発向、福州を攻申筈に御座候。

清軍の方でも兵糧不足に苦しんでおり、鄭氏から清朝に降った兵士も、十分な兵糧を支給されず、山賊と化して清軍を悩ませており、鄭経は軍勢を立て直し、福州への反攻を準備しているというのである。

つづく「四番潮州船」は、七月七日付けの風説書に、「私共乗り渡り申候船之儀は、則ち劉伯爺仕出し之船にて御座候」とあるように、潮州の劉進忠が派遣した商船であった。この風説書では、「三番思明州船」の報告どおり鄭経は敗退し、さらに広東の平南王も清朝に降伏したことを伝えている。一方で劉進忠については、「髪を剃り、右の通り降参候、内証は錦舍に密々之往来諸事共に少も別儀無御座候」と、やはり清朝に投降して剃髪しながらも、陰では鄭経と密通していると述べている^⑪。またこの風説書では、鄭経の敗因について、「三番思明州船」とは異なる見解も見られる。

第一は錦舍程之仁慈深き頼敷大将を、手下之諸将共、不可然者ども多御座候……此六部之諸官皆々私欲を振廻、錦

舍江かくし、民百姓に私之課役をかけ、銘々に貪り東寧へはこび、思ひ思ひにかくし置申様子共に而御座候を、錦舎は努々存不申候、其事つのもり申候故、軍民共に一同に変乱を起し申候事に御座候。

鄭経が仁徳に秀でた大将であるが、配下の官員の不正を抑制できず、彼らが大陸の人民から財物を擄取して台湾に運ぶことを放置し、この結果、軍民が一切に離反したことが、最大の敗因だとするのである。

ついで七月一二日には、「六番思明州船」船頭の龔二娘・黄熊官が、さらに鄭経の大敗について詳しい情報をもたらしている^②。龔二娘・黄熊官は、鄭経御用達の商人であり、この時も鄭氏から長崎奉行や唐通事に宛てた書簡を所持していた^③。彼らの報告は、鄭氏陣営の情勢認識をある程度代辯するものといえるだろう。彼らの供述によれば、清軍は詭計をめぐらし、鄭経の武將で汀州を守備していた劉応麟・裴徳（別名薛進思）を離間させ、これによって汀州と邵武も攻略した。そして「右汀州邵武之二府変失之根元により、漳州泉州并に広東之内惠州潮州変乱も右之基にて御座候」とあるように、漳州・泉州、および広東の潮州・惠州も鄭経から離反し、鄭経は廈門に撤退せざるを得なかったのだという。

さらに龔二娘と黄熊官は、鄭経の敗退の内部的要因には、「手前よりの変乱」と「兵糧に指詰りての事」にあったとも指摘している。

惣而錦舎儀、別而仁徳慈愛ともに深き大将に而、民百姓をそこない申候事、曾而不仕本意に御座候……民百姓に理不尽之課役に而も懸け候はば、兵卒養ひ候事も成事に候得ども、曾而左様之事を不仕大将に而御座候、依夫兵卒共へ之ふれながしにも、何方へも参度者之分は、勝手次第に仕候様にと再三中触候により、兵糧続ぎなき者どもは、不残諸方へ打散り申候。

鄭経は仁愛の心が深く、過重な租税や賦役を課して人民を苦しめることを望まなかった。このため大規模な軍事行動を支えるだけの軍糧を確保できず、さらに兵士が戦列を離れることも抑制しなかったため、結局は多くの兵士が離散してしまつたというのである。ただしそれらの兵士は清朝に帰服したわけではなく、「諸方之山々谷々にしのび居、錦舎兵

糧有余之時節を相待罷在候志に而御座候」と、山谷にしので、鄭経が軍糧を確保して再起することを待っているのだとする。そして、「大清方諸將之内より錦舍へ内通致し」、「福州の儀は我等と呉三桂之間に被挟有之事に候間、何時も此方兵糧次第に掌に入候事」と、清朝側の諸將も鄭経や呉三桂に内通しており、兵糧さえ続けば、鄭経と呉三桂で福州を挟撃できるという、希望的観測も伝えている。

また七月一〇日の「一一番思明州船」風説書では^④、耿精忠がふたたび清朝に背き、潮州の劉進忠とともに、鄭経に帰順するという風説を伝え、さらに「平南王も又々大明に成申より外は御座有間敷候と、皆々申事に御座候」と、広東の平南王までも、反清勢力に復帰し、鄭経は容易に漳州府・泉州府を奪回できるだろうという、きわめて鄭氏側に都合のいい展望を示している。鄭経について、「仁慈を専と仕本意に而御座候により、人民之慕ひ、近代に無之大将と皆々申事御座候」と、仁慈ある大将だと述べるのも、上述の潮州船・廈門船の風説書と同様であった。

さらに「二九番普陀山船」も、「鄭経手下宋都督と申者、初而仕出し申候」とあるように、鄭氏勢力が派遣した商船であった。一二月三日付けのその風説書では、「潮州府只今は錦舍手に罷成申候」と、鄭経が潮州をふたたび攻略したと伝えているが、事実ではない。廈門に撤収した鄭経は、劉国軒の奮戦によって、一時は海澄県を奪還し、泉州府を包囲したものの^⑤、結局は清軍に撃退され、康熙一九（一六八〇）年二月、鄭経はついに廈門までも放棄して、台湾に撤退することを余儀なくされたのである。

なお耿精忠が清朝に投降してから、福州船はしばらく『華夷変態』から姿を消している。本節で紹介した風説書は、①「二番南京船」・②「三番思明州船」・③「四番潮州船」・④「六番思明州船」・⑤「二一番思明州船」・⑥「二九番普陀山船」のものであり、①・③・⑥は清朝の支配地域、②・④・⑤は鄭氏の支配地域から出航したものであった。このうち①南京船は、烏龍江の戦いにおいて鄭軍が大勝したという根拠のない風聞をもたらし、⑥普陀山船も、鄭軍が潮州を再攻略したという事実とは異なる情報を伝えている。清朝の支配地域にあっても、鄭氏の側に有利な風聞が流布していたことを伺わせるが、特に海商たちのなかには、もともと鄭氏側とのつながりを持ち、肩入れをする者も多かったの

かも知れない。一方、鄭經の本拠地である廈門から渡航した②④⑤の海商は、鄭經の大敗を隠さずに報告しているが、同時にその敗因を清朝の策謀や兵糧不足による兵士の逃散などに帰し、また鄭經の仁政を強調することも多い。一方で鄭經の勢力下から離脱した潮州から来航した③の海商は、鄭經自身が仁慈ある大将ではあるが、その配下の官吏による苛斂が横行し、民衆が離反して敗局を決定づけたと述べ、鄭氏による領地恢復に悲観的であった。

上述したように、『靖海志』・『台湾外記』などの野史類では、鄭經の失敗をその大将の無能やお互いの猜疑に求め、鄭氏勢力による過重な賦課についても記している⁷⁶。一方で清朝の檔案や官制史書では、皇帝の「神機」や「威福」、將軍の「調度有方」、兵士の「奮勇」が、清軍の勝利をもたらしたという定型的な叙述が多い。それに対し、本節で紹介した風説書では、官撰史書や野史に記された、官僚や文人の見解とは異なる、海商たちのもたらした情報が記されているが、それらの内容には、彼らの出航地の状況や政治権力との関わりに応じて、さまざまなバイアスも認められるのである。

おわりに

本稿では、三藩の乱に呼応して大陸に進攻した、鄭經の「西征」について、華人海商が日本にもたらした情報を、『華夷変態』に収録された唐船風説書によって検討してきた。そのなかには根拠の乏しい風説や、政治的バイアスのかかった情報も少なからず含まれるが、一方で官撰史書や野史などの、官僚や文人の手による漢文文献には現れない、各地の海商たちの情勢認識を具体的に知ることができる。

こうした唐船風説書を通じて、中国情勢を注視してきた林春勝は、当初は『華夷変態』の序文に記しているように、「もし夷狄である清朝が、中華である明朝に変われば、外国のこととはいえ、また痛快ではないか」と、反清勢力の動向に期待を寄せていた⁷⁷。しかし三藩側の劣勢が明らかになった延宝六（一六七八）年になると、「吳三桂・鄭經の外、

福建の耿氏（精忠）、及び孫將軍（延齡）、平南王（尚可喜）らが各々割拠したが、始めは呉・鄭と呼応したものの、ふたたび清朝に投降したという。呉・鄭は蜂蟻の類にすぎず、算えるに足りなかった」と述べ⁷⁸、「反清勢力に冷淡な評価を下している。

本稿で論じたように、三藩の乱に際して、反清勢力の支配下から来航した商船だけではなく、清朝の支配下にあった江浙方面から来航した海商も、実態よりも反清勢力に有利な情報を伝えることがあった。一方で鄭経と耿精忠の内訌や、鄭経の広東進軍に関しては、鄭経・耿精忠・尚可喜とつながりのある海商らは、それぞれ自陣営の正当性や優位性を示す情報を伝える傾向が認められる。また鄭経が清軍に大敗し、福建の支配地を喪失した際にも、台湾や廈門から来航した海商たちは、鄭経の仁政や正当性を喧伝し、今後の戦況についても希望的観測を示している。

このようなバイアスがかかった情報が、ことさらに海商たちの背景にある政治勢力に有利な情勢を伝えようとしたものなのか、実際に彼らの出航地において、このような風説が一般的に流布していたのかは、明らかではない。三藩の乱の時期には、清朝も反乱側も、自陣営の優勢を誇示する情報を、意図的に敵地まで流布させようとしており⁷⁹、唐船風説書に記された情勢分析も、このような情報戦の影響を受けていた可能性は想定できるだろう。

従来の研究において、唐船風説書に残された海外記事は、漢文史料には記されていない独自の情報源として活用されてきた。しかしそれらの唐船の出航地や政治権力との関係に応じた情報のバイアスについては、必ずしも十分に論じられていなかったように思われる。華人海商たちが長崎にもたらした海外情報は、他の史料には現れない事実関係を伝えるだけではなく、海商たちがいかなる情報を、いかなるルートで収集し、伝達していたかという状況を示す意味でも、興味深い研究対象といえよう。特に鄭氏勢力の動向については、鄭経の「西征」の挫折後も、その子の鄭克塽が康熙二二（一六八三）年に清朝に降伏するまで、多くの情報が唐船風説書に記されており⁸⁰、それらの記事についても稿を改めて検討を進めていきたいと考えている。

註

- (1) 稻葉岩吉『清朝全史』(早稲田大学出版部、一九一四年)四五六〜四七二頁。細谷良夫「三藩の乱の再検討」尚可喜一族の動向を中心に(『東北大学東洋史論集』第一輯、一九八四年)、同「三藩の乱をめぐる一呉三桂の反乱と楊起隆・朱三太子事件」(歴史学研究会編『戦争と平和の中近世史』青木書店、二〇〇一年)。劉鳳雲『清代三藩研究』(中国人民大学出版社、一九九四年)。神田信夫「平西王吳三桂の研究」、清初三藩の富強の一側面(『清朝史論考』山川出版社、二〇〇五年、初出一九五二年、一九五五年)。滕紹箴『三藩史略』(中国社会科学出版社、二〇〇八年)。
- (2) 川口長孺『台湾鄭氏紀事』卷之下(文政一一(一八二八)年序、台湾銀行經濟研究室編印、一九五八年)。
- (3) 宮崎来城『鄭成功』(大学館、一九〇三年)二二〇〜二三六頁。
- (4) 稻垣孫兵衛『鄭成功』(台湾経世新報社、一九二九年)四六三〜五四八頁。
- (5) 石原道博『日本乞師の研究』(富山房、一九四五年)七六〜一二二頁。林田芳雄『鄭氏台湾史—鄭成功三代の興亡実紀』(汲古書院、二〇〇三年)八三〜九〇頁。
- (6) 楊雲萍「鄭経進征大陸的始末」(『楊雲萍全集』五、国立台湾文学館、二〇一一年、初出一九六一年)。張莢『鄭経鄭克塽紀事』(台湾研究叢刊第八十六種、台湾銀行、一九六六年)。黃玉齋『明延平王三世』(海峽學術出版社、二〇〇四年)四五〜一四一頁。葉高樹「三藩之乱期間鄭経在東南沿海的軍事活動」(『国立台湾師範大学歴史学報』第二七期、一九九九年)。
- (7) 李鴻彬「鄭経与三藩之乱」(『台湾研究集刊』一九八四年第四期)。張仁忠「六十年風雲—鄭氏四世与台湾」(九州出版社、二〇〇〇年)一七一〜一九四頁。
- (8) 鄭氏勢力・靖南王・平南王の対外貿易について、浦廉一(李孝本訳)「延平王戸官鄭泰長崎存銀之研究」(『台湾風物』一一卷三号、一九六一年)、朱徳蘭「清初遷界令時中国船海上貿易之研究」(『中国海洋發展史論文集』一一、中央研究院三民主義研究所、一九八六年)、龐新平「『華夷変態』から見た清初の海禁と長崎貿易」(『大阪経大論集』五五卷一号、二〇〇四年)、同「清初海禁期

における広東地域の長崎貿易」(『東洋学報』九一卷四号、二〇一〇年)、鄭維中(郭陽訳)「清朝の台湾征服とオランダ東インド会社」(中島楽章編『南蛮・紅毛・唐人一六・一七世紀の東アジア海域』思文閣出版、二〇一三年)など、参照。鄭氏勢力とイギリスとの関係については、『一七世紀台湾英国貿易史料』(台湾銀行経済研究室編、一九五九年)がある。

(9) 李中勇「康熙統一台湾期間清廷同荷蘭的軍事接触」(『歴史檔案』二〇〇五年三期)。

(10) 浦廉一「台湾鄭氏(特に鄭經)と朝鮮との関係」(『広島大学文学部紀要』三号、一九五三年)、神田信夫「三藩の乱と朝鮮」(『清朝史論考』初出一九五一年)、葛兆光「乱臣、英雄抑或叛賊?—從清初朝鮮対吳三桂の各種評價説起」(『中国文化研究』春之巻、二〇一二年)、参照。

(11) 東洋文庫復一雄編『華夷変態』(東方書店、一九八一年)。

(12) 林春勝「吳鄭論」(日野龍夫解題『鷲峯林学士文集』上、第四八巻、ペリかん社、一九九七年)五一〇頁、「爾来商船至長崎、伝説錦舍事多々、三桂事偶聞之、粗而不精。乃知錦舍所在者去長崎不甚遠、故商賈亦有所聞見、三桂所居者西南海陸遙隔、故絶其親故乎」。

(13) 前掲川口長孺『台湾鄭氏紀事』五九〜六〇頁、宮崎来城『鄭成功』二二二〜二三三頁、稻葉岩吉『清朝全史』四六一〜四六二頁、張炎『鄭經鄭克塽紀事』七六頁、張仁忠『六十年風雲・鄭氏四世与台湾』一七三頁、朱希祖「吳三桂周王紀年疑」(『中央研究院歷史語言所集刊』第二本四分、一九三二年)三九三〜三九五頁、孫文『唐船風説…文献与歴史—『華夷変態』初探』(商務印書館、二〇一一年)一九六〜一九八頁など。

(14) 『華夷変態』巻二、五三頁。

(15) 浦廉一「華夷変態解題—唐船風説書の研究—」(『華夷変態』上)二八頁。

(16) 林春勝「華夷変態序」(『華夷変態』一頁)。

(17) 『華夷変態』巻二、八五頁。

(18) 『華夷変態』巻二、八一頁、「海辺国姓鄭率日本琉球安南交趾女直朝鮮諸国伏兵数百万、選将数千員、焦思日久、共勦大挙」。真

唐船風説書に見る鄭經の「西征」(郭)

栄平房昭「近世琉球の对中国外交―明清動乱期を中心に」(『地方史研究』三五卷五号、一九八五年)四九頁を参照。

- (19) 小宮木代良「明末清初日本乞師」に対する家光政権の対応―正保三年一月十二日付板倉重宗書状の検討を中心として」(『九州史学』九七号、一九九〇年)。

- (20) 『華夷変態』卷一、四六〇―四七頁、卷五(第二種)、二一九頁。

- (21) 以下の叙述は、主に夏琳『閩海紀要』(台湾銀行經濟研究室編印、一九五八年)、彭孫貽・李延昱『靖海志』(台湾銀行經濟研究室編印、一九五九年)、江日昇『台湾外記』(台湾銀行經濟研究室編印、一九六〇年)、「清三藩史料」(『文献叢編』台湾国風出版社、一九六四年)、『康熙統一台湾檔案史料選輯』(福建人民出版社、一九八三年)などに基づいてまとめた。また張莢前掲『鄭經鄭克塽紀事』、林田前掲『鄭氏台湾史』、葉高樹前掲「三藩之乱期間鄭經在東南沿海的軍事活動」なども参照。

- (22) 『華夷変態』卷二、六〇〇―六一頁。

- (23) 『華夷変態』卷二、七一〇―七二頁。

- (24) 『華夷変態』卷二、七二頁。

- (25) 『華夷変態』卷二、七五―七六頁。

- (26) 王走虎は王老虎の誤字、元漳州副將、後に耿精忠に都尉に拔擢された王進の綽名。『閩海紀要』卷之下、四四頁。

- (27) 『華夷変態』卷二、九七頁。

- (28) 『華夷変態』卷二、九七頁。

- (29) 『台湾外記』卷六、二六七頁。

- (30) 『靖海志』卷四、七五〇―七六一頁。

- (31) 鄭經「皇明石井鄭氏祖墳志銘」(何丙仲『廈門石刻擷珍』廈門大学出版社、二〇一一年)二一八頁、「黃梧」遂忍人所不可忍、倡發掘墳以結虜歛……窃以舉大事者当收拾人心、籠絡英傑、若光復伊始而驟報和讎、恐非所以激励天下士也、故於逆臣之子芳度姑置度外。『台湾外記』卷六、二七六頁。

- (32) 『華夷変態』卷二、九七〜九八頁。
- (33) 『華夷変態』卷三、一〇五頁。
- (34) 風説書では、双方が「縁を結び」と書いてあり、恰も姻戚関係を結んだような記述であるが、恐らく唐通事の誤解だろう。漢文史料によれば、耿精忠が鄭経に正月の祝賀を行ったうえで講和を結んだという。『閩海紀要』卷之下、四六頁などを参照。
- (35) 『閩海紀要』卷之下、四四頁。『靖海志』卷四、七六頁。『台湾外記』卷六、二八三頁。
- (36) 「總督江南江西地方等処文武事務阿席熙咨 康熙一三年五月二十七日」(『清三藩史料』四〜五頁。『平定三逆方略』卷六、五月丁亥条。
- (37) 『台湾外記』卷六、二七八頁。『靖海志』卷四、七六頁。
- (38) 『平定三逆方略』卷二〇、康熙一三年二月癸酉条。
- (39) 『台湾外記』卷七、二九一頁。張炎前掲『鄭経鄭克塽紀事』八九頁。
- (40) ここでは「安定候」とするが、『靖海志』七八頁によれば、実際には「懷安候」である。
- (41) 『華夷変態』卷三、一一九頁。
- (42) ここでは平南王の「聲」とするが、張炎前掲『鄭経鄭克塽紀事』八九頁によれば、実際には「外孫」である。
- (43) 「平南王尚可喜奏」(『清三藩史料』二二六頁、「耿繼茂女嫁為臣之夫婦、臣男尚之孝所生孫女又嫁耿精忠子婦」。
- (44) 『華夷変態』卷三、一一九〜一三〇頁。
- (45) 「議政王等議海澄公黃芳度疏之題本 康熙一四年七月二四日」、「議政王等議海澄公黃芳度疏之題本 康熙一四年八月一三日」(『清三藩史料』四三七、四五七頁。『平定三逆方略』卷二、康熙一五年三月癸未条。『台湾外記』卷七、二九四〜二九八頁。
- (46) 『華夷変態』卷三、一三四頁。
- (47) 『華夷変態』卷四、一四四頁。
- (48) ここにいう「女王」は孔四貞のこと。四貞は定南王孔有徳の娘で、有徳の死後、夫の孫延齡が清朝に広西將軍に任じられたが、

吳三桂に降伏した。『平定三逆方略』卷一、康熙一二年二月丁巳条。

- (49) 『平定三逆方略』卷二一、康熙一五年二月戊午条、庚午条。
- (50) 『平定三逆方略』卷一七、康熙一四年七月壬子条。
- (51) 『清聖祖実録』卷六〇、『平定三逆方略』卷二三、康熙一五年四月辛酉条。
- (52) 『華夷変態』卷四、一五〇～一五一頁。
- (53) 『台湾外記』卷七、三〇四頁。『靖海志』卷四、八〇頁。
- (54) 『閩海紀要』卷下、康熙一五年二月。
- (55) 『華夷変態』卷四、一五一頁。
- (56) 『華夷変態』卷四、一五一頁。
- (57) 『華夷変態』卷四、一六五頁。
- (58) 『華夷変態』卷四、一五八頁。
- (59) 『平定三逆方略』卷二七、康熙一五年一月乙酉条。
- (60) 『華夷変態』卷五、一七四頁。
- (61) 『台湾外記』卷七、三〇八～三一頁。『靖海志』卷四、八一頁。
- (62) 『靖海志』卷四、八一頁。
- (63) 『平定三逆方略』卷二七、康熙一五年一月丙戌条。『靖海志』卷四、康熙一五年一〇月、八一頁。
- (64) 『華夷変態』卷五、一七六頁。
- (65) 『傑淑等題為恢復邵武等処地方事本』(『康熙統一台湾檔案史料選輯』) 一一〇頁。
- (66) 『平定三逆方略』卷二八、康熙一六年正月甲辰条。
- (67) 『平定三逆方略』卷二八、康熙一六年二月丁卯条。

- (68) 『平定三逆方略』卷二九、康熙一六年三月戊寅条。
- (69) 「郎廷相題為收復漳州郡情形事本」(『康熙統一台湾檔案史料選輯』一二三頁)。
- (70) 『華夷變態』卷五、一七八頁。
- (71) 『華夷變態』卷五、一八四〜一八五頁。
- (72) 以下、『華夷變態』卷五、一八六〜一八八頁による。
- (73) 『華夷變態』卷五、一九〇頁。浦廉一「延平王戸官鄭泰長崎存銀之研究」を参照。
- (74) 以下、『華夷變態』卷五、一九一〜一九四頁による。
- (75) 『平定三逆方略』卷二九、康熙一七年七月己亥条、戊午条。
- (76) 『台湾外記』卷八、三四五頁。
- (77) 林春勝「華夷變態序」(『華夷變態』一頁、「若夫有為夷變於華之態、則縱異方域、不亦快乎。」)
- (78) 林春勝「吳鄭論」五一〇頁、「又聞吳鄭之外、如福建耿氏、及孫將軍、平南王、各割拠一方、然始與吳鄭相応、又降韃寇、吳鄭則蜂蟻之類、不足算也。」
- (79) 典型的な史料として、「安遠靖寇大將軍尚善論稿」(『清三藩史料』五〇一頁、「[吳三桂]乃專務詭詐、往々以敗為勝、蠱惑人心」などを参照。
- (80) 拙稿「日本長崎唐通事眼中的康熙復台―以『華夷變態』為中心」(張海鵬・李細珠編『台湾歴史研究』第一輯、社会科学文献出版社、二〇一三年)を参照。

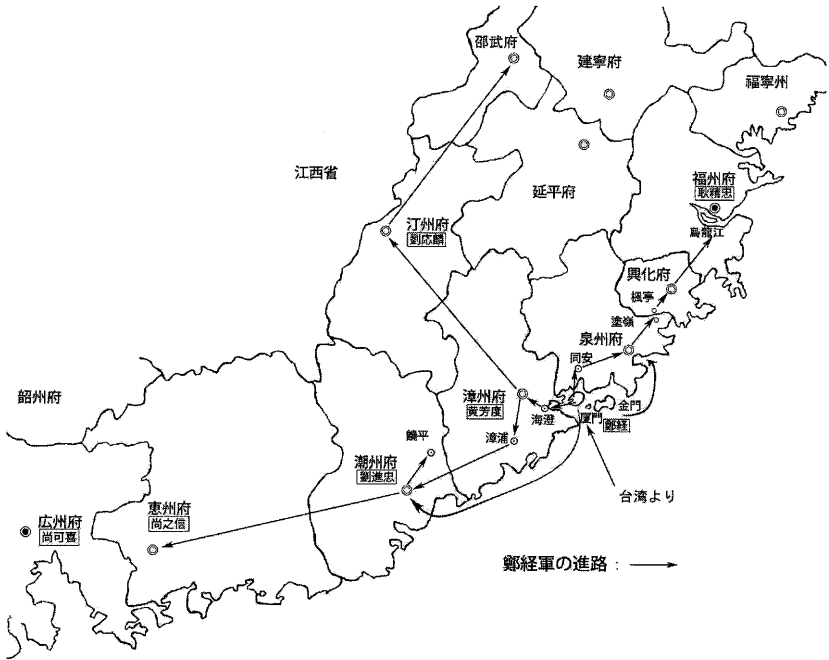
参考資料

【表】三藩の乱と鄭経の「西征」の関連年表		戦役の経過	唐船風説書の聴取日
年代			
康熙一二（永曆二七・延宝元・一六七三）年	<p>一月 吳三桂が雲南で挙兵</p>		
康熙一三（永曆二八・延宝二・一六七四）年	<p>二月 広西將軍孫延齡が吳三桂に帰伏</p> <p>三月 耿精忠が福州で反乱、福建全省を制圧</p> <p>四月 鄭経が廈門に出兵、海澄・同安守將が鄭経に降伏。潮州劉進忠が耿精忠に投降</p> <p>六月 泉州守將・漳州黃芳度が鄭経に降伏</p> <p>七月 潮州劉進忠が鄭経に寝返る</p> <p>九月 耿精忠が泉州を攻撃</p> <p>一〇月 鄭軍が耿軍を破り、興化まで追撃</p> <p>一一月 漳浦守將が鄭経に降伏</p> <p>一二月 鄭軍が潮州へ増援、平南王軍と開戦。陝西提督王輔臣が反乱</p>	<p>五月 二番福州船</p> <p>六月一四日 八・九番東寧船</p> <p>七月一五日 一番広東船</p> <p>一〇月一七日 二二番福州船</p>	
康熙一四（永曆二九・延宝三・一六六九）年	<p>正月 鄭・耿が講和、饒平を占拠した統順公沈瑞が鄭経に降伏</p> <p>五月 鄭軍が潮州で平南王軍を撃退</p>		<p>三月晦日 一番福州船</p> <p>七月二〇日 二七番思明州船</p>

<p>七五) 年</p>	<p>六月 漳州黄芳度が籠城、鄭軍が漳州を攻撃</p> <p>一〇月 黄芳度配下の呉淑が鄭経に寝返り、漳州が落城</p>	<p>十一月二五日 二八番福州船</p>
<p>康熙一五(永曆三〇・延宝四・一六七六) 年</p>	<p>二月 平南王が呉三桂に降伏、惠州を鄭経に讓渡</p> <p>五月 汀州守将が鄭経に寝返る</p> <p>六月 王輔臣が清朝に投降</p> <p>一〇月 耿精忠が清朝に降伏、興化守将が鄭経に投降、清朝が烏龍江で鄭軍を撃破。平南王尚可喜が病死</p> <p>十一月 邵武守将が鄭経に降伏</p> <p>十二月 尚之信が清朝に帰順を表明、清軍が邵武・汀州を攻落。</p>	<p>二月八日 一・二番福州船</p> <p>六月四日 六番潮州船</p> <p>七月二日 一〇・一一・一二番東寧三艘船</p> <p>八月五日 二一番広東船</p>
<p>康熙一六(永曆三一・延宝五・一六七七) 年</p>	<p>正月 清軍が興化を攻落</p> <p>二月 清軍が泉州・漳州を攻略、鄭経が廈門へ撤退</p> <p>三月 潮州劉進忠が清朝に帰伏</p> <p>五月 尚之信が清朝に帰伏</p> <p>六月 鄭経が惠州を放棄</p>	<p>正月一三日 一番南京船</p> <p>三月一三日 二番南京船</p> <p>六月一九日 三番思明州船</p> <p>七月七日 四番潮州船</p> <p>七月二日 六番思明州船</p> <p>七月一〇日 一一番思明州船</p> <p>一二月三日 二九番普陀山船</p>
<p>康熙一七(永曆三二・延宝六・一六七八) 年</p>	<p>三月 呉三桂が大周国皇帝に即位</p> <p>六月 鄭経配下の劉国軒が海澄を攻落</p> <p>七月 劉国軒が泉州を包囲</p> <p>八月 呉三桂が病死、孫の世璠が即位</p>	

康熙一九（永曆三 四・延宝八・一六 八〇）年	二月 劉国軒が海澄を放棄、鄭経が廈門から台湾へ撤退	
康熙二〇（永曆三 五・天和元・一六 八一）年	正月 鄭経が台湾で病死 一〇月 清軍が昆明を攻落、呉世璠が自殺	

出典：『清三藩史料』、『康熙統一台湾档案史料選輯』、『平定三逆方略』、『靖海志』、『台湾外記』、『華夷変態』。



鄭経の「西征」関連地図 (譚其驥主編『中国歴史地図集元・明時期』(中国地区出版社、一九八二年) 七〇～七三頁、明代福建・広東地図により筆者が作成)